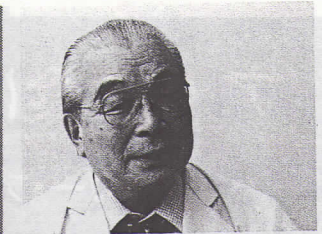


ガン・食事療法における問題点



国際自然医学会会長・
お茶の水クリニック院長
森下 敬一

●1950～1970の20年間に及ぶ「食と血と癌」の基礎研究を終え、私は「玄米・胡麻塩食」を採用して「癌の食事療法」を始めた（'70）。それは「同化作用の過大な累積によって自然治癒能が激減し、癌その他が発症する。従って、その治療には異化作用的食事療法を実践しながら、自然治癒能の勵起を促がすのが最良策」と考えたからである。

以来、「癌の食事療法」・40年の臨床を踏まえ、学び得た事を要述する。

①「生体基本代謝の往（発展）・復（収斂）理論」（森下、1960及2003）の基本通り、人体内徹底浄化は絶食や玄米飯単食療法等の人体異化作用を前提として可能となる。因みに、当理論の往（発展）は「腸（食）→血→体」の遠心性発展機構で、復（収斂）は「体→血（末梢血液空間）→肝→腸」の求心性収斂機構の事である。

②人体異化作用即「求心性収斂機構」発動時には、病的組織特に癌（腫瘍）組織や脂肪組織から優先的に組織崩壊し、是等は老廃組織球・細菌及ウイルス等に解体され、肝臓を経由して腸管内に排出される。この処理には、主に「ポンパ血管」（森下、1998）や「末梢血液空間」（森下、2003）が関与する。

③「玄米・胡麻塩療法」は栄養療法——というよりは、異化作用の長期的凋落に歯止めを掛ける用法である。癌性羸瘦は、体内の食毒・薬毒充満によって基礎体力及自然治癒力が持続的に阻碍状態に在る——という事を意味する。

其故、基礎体力の温存（同化作用）を図りつつ食毒・薬毒を排除（異化作用）する——という二律背反的調整には、血液検査のみならず新たな氣能医学的検索を導入の上、体調完全管理、強化食品・薬草茶等の適切処方不可欠となる。このような作業の底流にあって、その基準食となるのが「玄米・胡麻塩療法」である。異化作用的羸瘦に歯止めを掛け、自然治癒力勵起を促してくれるのが、玄米飯であり胡麻塩なのだ。

大自然によって生かされている事への感謝と食物の咀嚼、そして「適塩・適水」即ち「減塩・無塩不可」「過剰水分供給禁止」を心掛けるべし。

森下敬一会長 著書

左から ●『自然医学の基礎』

美土里書房 定価(本体 5000 円+税)

●『自然医学のすすめ』

美土里書房 定価(本体 1000 円+税)

